

『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (6)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 66 号抜刷

2017年2月

## 『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (6)

澤 田 稔

### はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第 65 号(2016 年 8 月)掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (5)」の続編であり、日本語訳する範囲は底本 (D126 写本) の p. 133 / fol. 67a の 12 行目から p. 164 / fol. 82b の 20 行目までである。

前号の末尾で叙述されたように、ホージャ・ジャハーンの 2 人の甥、ホージャ・ヤフヤーとホージャ・ムーミンはヤルカンドとカシュガルの軍勢を率いて、カルマク (ジュンガル) と清朝軍に支援されたホージャ・ブルハーン・アッディーンの拠るウシュ (ウチュ) 城市に接近した。それに続いて本号では、ホージャ・ジャハーンを長とするカシュガル・ホージャ家イスハーク派と、同家アーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーンとの間で始まった抗争・戦闘の推移について、ベグと呼称される有力者やクルグズ遊牧民などの動向に触れながら叙述されていく。

### 日本語訳注

物語の章。ホージャ・ヤフヤー狎下<sup>1)</sup>とホージャ・ムーミン<sup>2)</sup>について聞かねばならない。

この軍とともにウシュ城市の前近くに来て、部隊の前衛を配置し、隊列をチェスの列のように組み、戦士としての仕事 (sipāhgarčilik<sup>3)</sup>) を明らかにして、「我々がまず使者を送り、彼らが服属するならばよかろう。さもなければ、[戦いの]<sup>4)</sup>準備をすれば[よかろう]」と、得策を示し、ヤルカンド [軍] からトフタ・ベグ、この人は後にカシュガルの出納官 (Kāšqarga ġazānčī) となったのであるが、そして、カシュガル [軍] からベシユケリムのハーキム、ムハッラム・ベグを、

---

1) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの二男 (本書 [p. 65 / fol. 33a] 「日本語訳注 (3)」44 頁)。

2) ホージャ・ジャハーンの弟ユースフ・ホージャムの二男 (本書 [p. 69 / fol. 35a] 「日本語訳注 (3)」48 頁)。

3) D126; Or. 9660, fol. 75b; Or. 9662, fol. 88a は SPAKRČYLYK と綴るが、Or. 5338, fol. 71a の SPAHKRČYLYK による。

4) janggä。Or. 9660, fol. 75b; Cf. Or. 9662, fol. 88a による補遺。

ウマル・ミールザー<sup>5)</sup>〔の軍〕〔から一人の首領〕<sup>6)</sup>を、〔そして〕ムンキ・クルグズ<sup>7)</sup>〔の軍〕から (Mūnkī Qirgīzdīn<sup>8)</sup>)〔から一人の首領を〕<sup>9)</sup>〔選び〕、この四人の首領に十人以上の者を加えて、使者の仕事を命じた。【p. 134 / fol. 67b】この者たちに書状を用意して与えた。

この者たちは書状を頭の上に入れ、城市の門に来て使者であることを表明した。人が〔門のなかに〕入り、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムから許可を得て来て、〔この者たちは〕城市に入ってホージャ・ブルハーン・アッディーンの前に来た。すべての家僕 (ḥādim<sup>10)</sup>)は拘束され、少人数で入って敬意を表し、次のような有様を見た。すなわち、〔その軍は〕<sup>11)</sup>すべてカルマクにまみれ、中国人が混じり (tamām Qālmāq ālūd Hītāy alalaš), その言葉はカーフィル (不信仰者) 風で、驚くべき態度で驚くべき行動の集団であり、彼らからイスラーム信仰の香りは漂って来ない。真中で<sup>12)</sup>、栄誉の絨毯にホージャ・ブルハーン・アッディーン 陛下が坐っている。左右に、悪事を働き墮落して醜悪な考えのアミールたち<sup>13)</sup>、復讐心が強く残忍で悪しき信仰を持つイスラームの暴虐なウラマーが、知らないまま坐っている。世界中に騒擾が、海一面に怨恨が、この者たちの邪悪の内面から波打っている。

フダー・ヤール・ベグ (Ḥudā Yār Beg)<sup>14)</sup>の子ムハンマド・エミン・ベグ (Muḥammad<sup>15)</sup> Emīn Beg), アブドゥ・ラフマーン・ベグ (‘Abdū Raḥmān<sup>16)</sup> Beg), ユースフ・ベグ (Yūsuf Beg), シール・ムハンマド・エミン・ベグ (Šīr<sup>17)</sup> Muḥammad Emīn Beg), これらのベグは、ユースフ・ホージャム・パーディシャーがフダー・ヤールを捕まえた時、カシュガルから逃げてアクスに来て

5) ウマル・ミールザーはクプチャク・クルグズの首領 (sardār) であり、ヤルカンドのホージャ・ジャハーンにより「王国全体の宰相 (wazīr jumlat al-mulk)」に任じられている (本書【p. 110 / fol. 55b】「日本語訳注 (5)」23頁の注6, 【p. 115 / fol. 58a】「日本語訳注 (5)」27頁参照)。

6) ‘Umar Mīrzādīn bir sardārni. D126は「ウマル・ミールザーを (‘Umar Mīrzāni)」と記すが, Or. 9662, fol. 88aによる補遺。

7) ムンキはクルグズの1部族 (または氏族) (plemya munki / rod munki) である (M. A. Salakhedinova, “Sochinenie Mukhammed-Sadyka Kashgari „Tazkira-i-khodzhagan“ kak istochnik po istorii kirgizov,” *Izbestiya Akademii Nauk Kirgizskoi SSR*, tom 1, vypusk 1, Frunze, 1959, pp. 99, 100 参照)。

8) D126はQirgīzの後にMRYNと綴るが, Or. 9662, fol. 75b; Or. 9662, fol. 88aのDYNによる。

9) bir sardārni. Or. 9662, fol. 88aによる補遺。

10) 但し, D126; Or. 5338, fol. 71b; Or. 9660, fol. 75b; Or. 9662, fol. 88bはḤADYIMと綴る。以後、この語の綴りの相違については注記しない。

11) bularniñ laškarları. Or. 9660, fol. 75b; Cf. Or. 9662, fol. 88bによる補遺。

12) otrada. D126はAVTRDAと綴るが, Or. 5338, fol. 71b; Or. 9660, fol. 75bのAVTRADAによる。

13) umarā. D126は‘MRAと綴るが, Or. 5338, fol. 71bのAMRAによる。

14) カシュガルのイシク・アガであった (本書【p. 78 / fol. 39b】「日本語訳注 (4)」82頁参照)。

15) Or. 9660, fol. 76aはMemet (<MMT) と記す。

16) Or. 5338, fol. 71b; Or. 9660, fol. 76aは‘Abd Raḥmān. Or. 9662, fol. 89aは‘Abd al-Raḥmānと記す。

17) D126はŠRHと綴るが, Or. 9660, fol. 76aのŠYRによる。

いたが、今、この軍〔すなわち、ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の軍〕に加わってウシュに来ていた。さらに、アクスのハーキム、アブド・ワッハブ・ベグ、ウマル・ベグ、その息子<sup>18)</sup> アブドゥ・サッタール・ベグ (‘Abdū Sattār<sup>19)</sup> Beg), アブドゥ・ハーリク・ベグ (‘Abdū Ḥāliq<sup>20)</sup> Beg), ウシュのハーキム、ホージャ・スィーの息子ムザッファル・ベグ (Muẓaffar Beg), そこのイシク・アガ、ビシャーラト・ベグ (Bišārat<sup>21)</sup> Beg), クチャー (Kūčār) のハーキム、アッラー・クリ・ベグ (Allāh Qulī Beg), ムハンマド・ヤール (Muḥammad Yār) [・ベグ]<sup>22)</sup>, [p. 135 / fol. 68a] サイラム (Sayrām)<sup>23)</sup> のハーキム、アブドゥ・ラヒーム・ベグ (‘Abdū Raḥīm<sup>24)</sup> Beg), ドーラーン (Dōlān)<sup>25)</sup> のハーキム, サアダト (Sa‘ādat<sup>26)</sup>) [・ベグ]<sup>27)</sup>, ラーマーン・クリ・ベグ (Rāmān<sup>28)</sup> Qulī Beg), クルグズ [の] アブド・アッラー・ベグ (‘Abd Allāh Beg), ほかにアミールたち<sup>29)</sup> が多くいる。愚かな性格のアーホンたちのうち、ムッラー・アワズ・アーホン (Mullā ‘Awāḏ Āḥvun), ムッラー・クトウルク・アーホン (Mullā Qūtlūq Āḥvun), サッカール・アーホン (Saqqāl Āḥvun), ムッラー・バラート・アーホン (Mullā Barāt Āḥvun), [ムッラー・カシーム・アーホンド (Mullā Qasīm Āḥvund)]<sup>30)</sup>, 狂人のような (dīvāna-vaš) スーフイーたちのうち、ムンディ・スーフイー (Mūndī Šūfī), ラフマティーン・スーフイー (Raḥmatī<sup>31)</sup> Šūfī), ニヤーズ・スーフイー (Niyāz Šūfī), [ウマル・スーフイー (‘Umar Šūfī), クンダク (? )・スーフイー (Qūndāq(?))

18) 清朝史料 (『平定準噶爾方略』正編, 卷 61, 乾隆 23 年 9 月丁酉の条) によれば、アブドゥ・サッタール (阿卜都薩塔爾) はアブド・ワッハブ・ベグ (阿卜都瓜卜) の長子である (佐口透『18-19 世紀 東トルキスタン社会史研究』東京: 吉川弘文館, 1963 年, 62 頁参照)。

19) Or. 5338, fol. 72a; Or. 9662, fol. 89a は ‘Abd Sattār と記す。

20) Or. 5338, fol. 72a は ‘Abd al-Ḥāliq (*sic*), Or. 9660, fol. 76a; Or. 9662, fol. 89a は ‘Abd Ḥāliq / ‘Abd Ḥāliq (*sic*) と記す。

21) Or. 5338, fol. 72a; Or. 9660, fol. 76a; Or. 9662, fol. 89a は ŠART と綴る。

22) Or. 5338, fol. 72a; Or. 9660, fol. 76a; Or. 9662, fol. 89a による補遺。

23) クチャ (クチャー) の西方約 50km に位置する町。Sven Hedin, *Central Asia Atlas* (The Sino-Swedish Expedition, Publication 47, I. Geography, 1), Stockholm: Statens Etnografiska Museum, 1966, NK44 の地図では Sairam Bazar と表記されている。

24) Or. 5338, fol. 72a; Or. 9660, fol. 76a は ‘Abd Raḥīm, Or. 9662, fol. 89a は ‘Abd al-Raḥīm と記す。

25) タリム川流域のドーラーン族については、佐口透「ドーラーン人の歴史と民族誌」『新疆ムスリム研究』東京: 吉川弘文館, 1995 年, 140-170 頁 (初出は 1988 年) を参照されたい。

26) Or. 9660, fol. 76a は SADAT と綴る。

27) Or. 5338, fol. 72a; Or. 9660, fol. 76a; Or. 9662, fol. 89a による補遺。

28) Or. 9660, fol. 76a は ARMAN と綴る。

29) umarālar. D126 は ‘MRALAR と綴るが、Or. 5338, fol. 72a; Or. 9660, fol. 76a; Or. 9662, fol. 89a の AMRALAR による。

30) Or. 9662, fol. 89a; cf. Or. 9660, fol. 76a による補遺。

31) Or. 5338, fol. 72a は Raḥmat と記す。

Şüfi)〕<sup>32)</sup>、ほかに暴虐なアーホンたち、[愚かなたちスーフィーたち]<sup>33)</sup>が多くいた。[シナ] 皇帝の軍からトロムタイ大人 (Töröm-tāy<sup>34)</sup> Dārīn)<sup>35)</sup> が四百人の中国人 (Hīṭay) とともに来ていた。ダンジン・ジャイサン (Dānjīn Jaysaṅ<sup>36)</sup>) が千人のカルマクとともに来ていた。[さらに一集団のタグリク (「山人」) もいた]<sup>37)</sup>。

まさにこの一団のなかで使者たちは地面 [にひれ伏す] 儀礼をして (zamīn adab birlā)<sup>38)</sup>、書状を渡した。[書記 (munṣī) が]<sup>39)</sup> 書状を受け取って読んだ。次のように書いてある。すなわち、[おお、ホージャ・スィー [・ベグ]<sup>40)</sup> よ、次のことを知り賢明となれ。すなわち、我々はどれほどの期間、暴虐なカルマクたちに服属し、その命令により行動してきているのか。今や我々は、讃えられるべき至高なる神様の恩寵によりイスラームを鮮明にしてカーフィルたちから顔をそむけている。至高なる神からムスリムたちに勝利が授けられる望みがある。今そなたへの言葉は次のとおりである。そなたはカーフィルたちから顔をそむけてイスラームに援助するように。次のようにあらねばならない。そなたがそなたの人びととともにイスラームに援助して忠誠を誓うならば、[そして] 我々がここを過ぎ去りアクスへ、アブド・ワッハブ・ベグのもとに行くならば、[そして] 彼もイスラームに忠誠を誓うならば、[そして] 我々が協力してこれらの城市を強固にしておれば、[そして] 人を派遣してイラの事について情報を得て、今も [p. 136 / fol. 68b] [イラが] 分裂状態であれば、我々が軍を率いて [イスラーム] 信仰に招くならば、[そして彼らが] 信仰に [入るならば]<sup>41)</sup> それでよい。さもなければ、剣をふるって殺害して幾年もの間カーフィルたちの手中で囚われているサイドの子孫 (sayyidzāda), ハーンの子孫 (hānzāda) を解放し、この地方に連れてきて [統治の王座に坐らせ]<sup>42)</sup>、我々が以前

32) Or. 5338, fol. 72a による補遺。

33) jāhil ṣūfīlar. Or. 9662, fol. 89a; Or. 9660, fol. 76a による補遺。

34) Or. 5338, fol. 72a は TVRVM TAY, Or. 9660, fol. 76a は TVRVM TAY と綴る。

35) 侍衛トロンタイ Torontai (托倫泰) を指す (小沼孝博「在京ウイグル人の供述からみた 18 世紀中葉カシュガリア社会の政治的変動」『満族史研究』第 1 号, 2002 年, 49-50 頁, 小沼孝博『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の辺境へ——』東京: 東京大学出版会, 2014 年, 89-90 頁参照)。

36) ショー氏の英訳は Dān Jin-Jing と記し, Jin-Jing を Chiang-chün (將軍) とみなしているようであるが従えない (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Šādiq Kashghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, 1897, p. 51, footnote 41 参照)。ダンジン・ジャイサンはすでに本書 [p. 75 / fol. 38a] 「日本語訳注 (3)」53 頁に登場している。

37) Yana bir gurūh Taglīq ham bar erdi. Or. 9660, fol. 76b による補遺。

38) Or. 9660, fol. 76b は「地面にひれ伏し服従して (zamīn-būsa ‘ubūdiyatlar birlā) と記す。

39) Or. 9660, fol. 76b による補遺。

40) Or. 9660, fol. 76b; Or. 9662, fol. 89b による補遺。

41) kirsā / kirsālār. Or. 5338, fol. 72b; Or. 9660, fol. 76b による補遺。

42) taḥt-i salṭanatkā olturguzup. Or. 9660, fol. 76b-77a; Or. 9662, fol. 90a による補遺。

のように祈願者の仕事 (du‘ā-gūyliq) をして [礼拝行為に勤しむ]<sup>43)</sup> ならば, [そして] 我々各人が自身の職位を手に入れ, イスラームのやり方で国<sup>44)</sup> を整えるならば, 我々が聖戦 (ğazāt jihād) をして我々の黒い顔を白くするならば, 幾年もの間カーフィルたちに服属していたことを後悔し, 聖戦をして死ぬならば, 我々は殉教者の階に達するはずである。おお, ホージャ・スィー・ベグよ, そなたもイスラームを受け入れて心底から服従するならば, 我々は神に誓って<sup>45)</sup> 決してそなたのことに関与せず, そなた自身の地域のハーキム職を与え, 軍の総司令官 (sipah-sālār-i laškar) に必ずする。そなたの兄弟アブド・ワッハブ・ベグへの約束も同じである。そなたたちがイスラームを受け入れないならば [次のような事態になる]。幾団ものヤルカンド軍, カシュガル軍, ホタン軍, イェンギ・ヒサル軍, さらに, トクズ・クプチャク (Toquz Qifčaq), サルク・カルファク (Sariq Qalfaq), ナイマン (Nayman), チョン・バグシュ (Čoŋ Bağıš), オトゥズ・オグル (Otuz Oğul) というクルグズの幾つもの集団とともに, 我々, 数えきれない軍がそなたたち自身に対してやって来た。さらに, 数千人 [とともに]<sup>46)</sup>, 英雄ぶりで有名なクバード・ビヤ・バハードゥル (Qubād Biya Bahādur)<sup>47)</sup> も我々の後ろから来ている。我々は必ずこれらの軍勢でその諸城市の土を天にまき散らし, 人々を捕虜にする。書状を終える。平安あれかし。

さて, ホージャ・ブルハーン・アッディーン猊下は [p. 137 / fol. 69a] この書状 [の内容] を聞いて嘲笑し, 口を開いて次のように言った。すなわち, 「このヤルカンドのイスハーキーヤ<sup>48)</sup> のホージャたち (Yārkañd Ishāqiyya hōjalari) は未熟な考えでこの地にお越しになっている。自分たちの能力を知らないでいる。アムルサナーはシナ皇帝のもとに行き, 中国から軍を連れてきて, イラにおいて王座 (törälik taht) に就いた。ダバチを捕まえ, 鎖枷で拘束して皇

43) t̄ā‘at ibādatkā mašgūl bolsaq. Or. 9660, fol. 77a; Or. 9662, fol. 90a による補遺。

44) yurt. D126 は YVRVT と綴るが, Or. 9660, fol. 77a; Or. 9662, fol. 90a の YVRT による。以後, この綴りの相違については注記しない。

45) qasam ba-ħudā ki. Or. 9662, fol. 90a による。D126 は QSM MYZDANKH, Or. 5338, fol. 72b は QSM AVLKH, Or. 9660, fol. 77a は QSM BDATYKH と綴る。

46) birlä. Or. 9660, fol. 77a; Or. 9662, fol. 90a による補遺。

47) Or. 5338, fol. 73a; Or. 9660, fol. 77a; Or. 9662, fol. 90a は Qubād Mīrzā と記す。

48) イスハーキーヤ (イスハーク派) は, サマルカンドのナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミーアザムの子ホージャ・イスハークの子孫を指す。イスハーキーヤはカラタグ (黒い山) すなわちパミール高原方面のクルグズの間に勢力を拡大したため, 18 世紀の初め頃からカラタグリク (黒山党) と呼ばれるようになったという (濱田正美「黒山党」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京: 岩波書店, 2002 年, 368 頁, 濱田正美「カシュガル・ホージャ」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る辞典』東京: 平凡社, 2005 年, 124-125 頁)。なお, 後述の本書 [p. 152 / fol. 76b] に「カラタグ人 (黒山党)」の表現が出てくる。

帝のもとに送った。イラの中は〔今や〕<sup>49)</sup> 落ち着き、整えられた。〔以前の六か月間においてもカルマクの国のすべては片付き安定している。そのみならず、中国軍がイラにおいて過度に準備している〕<sup>50)</sup>。シナ皇帝をはじめアムルサナーは<sup>51)</sup>、これらの国の統治の王座とホージャ位 (hōjaliq) を我々に授けた。今や、このイスハーキーヤのホージャたちは皇帝とアムルサナーの勅令によりこれらの国を手放して<sup>52)</sup> イラに行き、アンバン (amban)<sup>53)</sup> とジャイサン<sup>54)</sup> たちに死罪〔の赦し〕を求めよ。さもなければ、〔次のような事態になる〕。今、我々のもとには、ダンジン・ジャイサンが千人のカルマク軍とともに来た。トロムタイ大人が四百人の中国軍とともに使者の地位で来た。五百人のタグリクの兵が来た。さらに一万人<sup>55)</sup> のカルマク軍がアクスに came<sup>56)</sup>。〔シナ皇帝、アムルサナーの勅令により〕<sup>57)</sup> 我々はこの軍勢を集め、このホージャたちの母親の腹を割いてその胎児におよぶまで羊のように喉を切って殺さねばならない。その言葉〔=勅令〕に背くならば、我々は必ずシナ皇帝、アムルサナーの手中において逆鱗に触れることになる」と言った。

使者はこの〔ホージャ・ブルハーン・アッディーン〕の言葉を聞き、正気が失せた。その大部分の者の本質に友情、誠実はなかった。むしろ、その性質において非情の **[p. 138 / fol. 69b]** 痕跡があった。それ故、ホージャ・ブルハーン・アッディーン猊下に忠誠を誓うことを受け入れ、ユースフ・ホージャムの逝去についての喜ばしい知らせを伝え、自分の一族 (qabīla) をくずしてこちら側に加わる<sup>58)</sup> 約束をして戻って行った。ムハッラム・ベグ、ニヤーズ・ベグはカルマクのもとに定着させられ (mu‘ayyan bolup) 決して出て行かなかった。トフタ・ベグ (Tōhta Beg) は加わる約束をして戻って行った。

さて、〔使者として行って戻ってきた〕〔これらの者は〕<sup>59)</sup> ホージャ・ヤフヤー・ホージャム

49) hālā / al-hāl. Or. 9660, fol. 77b; Or. 9662, fol. 90b による補遺。

50) Burunqī altā ayčīliq daqī Qālmāq yurtīnīn hamasī sar-anjām tapīp bar qarār boldī. Bal-ki Hītāy čeriki Īlā ičidā bar ziyādatī muhayyā dur. Or. 9660, fol. 77b; Cf. Or. 9662, fol. 90b による補遺。

51) Hāqān-i Čīn bašlīgīn ‘Amūršanā. D126; Or. 5338, fol. 73a は「シナ皇帝はアムルサナーをはじめ (Hāqān-i Čīn ‘Amūršanā bašlīgīn)」と記すが、Or. 9660, fol. 77b; Or. 9662, fol. 90b による。

52) qoyup berip. D126 は berip の部分を BARYB と綴るが、Or. 5338, fol. 73a; Or. 9660, fol. 77b; Or. 9662, fol. 90b の BRYB による。

53) アンバンはもともと満洲語であり、漢語の「大臣」を意味する。

54) ジャイサン (ザイサン) は、ジェーンガルの集団 (オトグ) を率いる遊牧領主の称号であり、君主のもとで政務に参与する者もいた。詳しくは、小沼孝博『清と中央アジア草原』40-45 頁参照。

55) Or. 9662, fol. 91a は「三千人 (üč miñ)」と記す。

56) Or. 9660, fol. 77b; Or. 9662, fol. 91a は「アクスに留まっていた (Aqsūda qaldī)」と記す。

57) Hāqān-i Čīn ‘Amūršanānīn yarlıgī birlā. Or. 9660, fol. 77b; Or. 9662, fol. 91a による補遺。

58) qoşulmaq. D126 は QVŠVALMAQ と綴るが、Or. 9660, fol. 78a; Or. 9662, fol. 91a の QVŠVLMQAQ による。

59) bular. Or. 9660, fol. 78a; Or. 9662, fol. 91a による補遺。

と会見して、起きた事を百倍ほど誇張して (yüz anča ašurup) 説明した。王子たち (šahzādalar)<sup>60)</sup> は大望と勇気をもって口を開いて次のように言った。すなわち、「我々は至高なる神の満足のためにカーフィルたちに対し剣を抜き、イスラームを広めている。たとえ、我々の殉教の死期が彼らの手中にあるとしても、我々にはイマーム・フサイン猊下 (Ḥaḍrat-i Imām Ḥusayn<sup>61)</sup>) から残る遺産がある。

詩

神が殉教を割り当てるようにと、魂は犠牲である<sup>62)</sup>

我がフサイン、我がカルバラーから私へのスンナはこうである

反逆の埃を〔何の〕<sup>63)</sup> ためにきれいにするのか。私は悲しみでありたい

ある日ついに、魂が身体にまさしく死期の面倒をかける

我々はそのような〔ホージャ・ブルハーン・アッディーン〕の言葉を気につけない。ホージャ・ブルハーン・アッディーンがカーフィルたちに味方せず、こちらの国 (bu yurtlar) に来ていたならば、我々にとって同胞 (qarīndaš) であった。我々はこのお方の眼の瞳に道を示し、〔このお方が〕どの城市の統治の王座を選んでも、そこを安定 [p. 139 / fol. 70a] させ、敵の撃退に努めることになった〔はずである〕。今、このお方はイスラームの地域にカーフィルたちの軍を率いて来て、カーフィルたちの勅命をもたらしている。我々はそのような同胞にうんざりしている。我々には、こちらの地にホージャ・ブルハーン・アッディーンが足を踏み入れたという知らせがなかった。むしろ我々の意図は、願いがかなうならば (murād qolğa kelsä), そのお方をカーフィルの捕囚から解放することであった。今や、天命から何が来ようとも、我々は喜んで従う」と言って、復讐の剣を腰にむすび、敵のほうへ向かった。

詩

私は天命に喜んで従った。誰が何をもたらそうと、我が運命である

---

60) ホージャ・ヤフヤーをはじめカシュガル・ホージャ家イスハーキーヤの成員をさしている。

61) D126 は ḤSN と綴るが、Or. 5338, fol. 73b; Or. 9660, fol. 78a; Or. 9662, fol. 91b の ḤSYN による。言うまでもなく、イマーム・フサインはアリーの子で、680年にイラクのカルバラーでウマイヤ朝軍に敗れ殉教した。

62) Or. 5338 写本の内容はここ (fol. 73b の最終行) で中絶し、fol. 74a に続かない。fol. 74a-b は本書全体の最末尾の部分にあたる。これにより、Or. 5338 写本は Shaw 氏の使用した写本の一つであることが確認される (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” p. 51, footnote 41 参照)。

63) ne. Or. 9662, fol. 91b による補遺。



私は何時、心のしっかりした友から苦しめられるだろうか  
 私は一人ひとりに百、それ以上、とても多く誠実を切望〔していた〕<sup>64)</sup>  
 来ることになった。私は迫害圧制にうんざりするだろう

さて、この王子たちの軍は完璧で、精選された武器装備〔があり〕、速い〔馬〕<sup>65)</sup>と乗用動物は肥えていて、全く不足はない。しかし、彼らの心は次のように望みを失っている。すなわち、「以前のカルマクたちの力強さが慮られ、その上に中国軍が加わった<sup>66)</sup>。そのように大きな後衛(arqa)の軍隊に直面して、結果はどうなるのであろう」と、幾人かの心に動揺が生じた。なぜならばまた、使者となって来た者たちにホージャ・ブルハーン・アッディーン猊下は次のように多くを約束していたからである。すなわち、「もし、そなたたちの【p. 140 / fol. 70b】指示により、そちら側の軍からクルグズであろうと、地元民(yerlik)であろうと、我々の軍に加わり、助け合うならば、我々はハーン、王(トレ)に書付を差し出し、すべての国をそなたたちに委ねよう、子から子へと伝わるようにダルハン<sup>67)</sup>にしよう、職位を与えて、ベグ<sup>68)</sup>にしよう」と言っていた。この悪しき信心の使者たちはこの約束を兵に説明すると、イスラーム信仰の薄弱な幾人かの人々の心はあちら側に傾き、その大望と勇気は弱まった。クルグズ、ろくでなしどもは心底からあちらの者たちに気持を向けた。

さて、王子たちは猶予を与えず、タグリクの軍と戦い、一時間で死人の小山を築いた。幾度かうシュ〔城市の〕門の前まで蹴散らして行った。カルマク軍の多くの者が死んだ。大部分の者が傷ついた。なぜならば、彼らの大部分の馬は痩せており、その装備はだめである(nā-kār)から。彼らを打倒する目前であった。イスラーム軍のうち少数の者が殉教していた。まさにこの状況においてクルグズ、ペてん師は「我々が少し後ろに退いてやり、この〔敵〕軍がより前方に来るならば、その後、我々が包囲してしまえば、一人の者〔も〕生き残らない」と忠告し、理にかなっているとみなさせた。イスラーム軍が少し後ろに動いた。クルグズたちは好機とみなし、ムンキ【p. 141 / fol. 71a】・クルグズは群がって(hujūm birlā)分離し、タグリクに加わった。これを見て、バハードゥル・ベグ<sup>69)</sup>の息子フダー・ベルディ・ベグは、ヤルカンドに対するシャ

64) qīlur erdim. Or. 9660, fol. 78b; Or. 9662, fol. 92a による補遺。

65) aḡ. Or. 9660, fol. 78b; Or. 9662, fol. 92a による補遺。

66) qoşuldi. D126 は QVSVDY と綴るが、Or. 9660, fol. 78b の QVŞVLDY による。

67) darḡan < DARĠHAN。ダルハン(タルハン)はトルコ・モンゴルの伝統に基づく特権身分を示す。間野英二『パプル・ナーマの研究 IV 研究篇 パプルとその時代』京都：松香堂、2001年、271-272、375頁、恵谷俊之「荅刺罕考」『東洋史研究』22-2、1963年、61-78頁参照。

68) Or. 9660, fol. 79a は beḡlārbegī と記す。

69) 本書【p. 136 / fol. 68b】で前出のクバード・ピヤ・バハードゥルを指していると思われる。

ン・ベギ<sup>70)</sup>であったが、〔戦列を〕崩して幾人かの者とともに〔タグリクに〕<sup>71)</sup>加わった。カルガリクのハーキム、ミール・ニヤーズ・ベグの息子ミール・アワズ・ベグは属人たちとともに〔戦列を〕崩して敵に加わった。これを見て、ホージャ・ヤフヤーとホージャ・ムーミンは行動を維持できなくなった (hifz-i harakatlāri ketti)。敵軍以上に自軍のほうを警戒した。あちら側の軍は強化された。この王子たちは残った軍とともに大望を抱こうとしたが、だめであった。仕方なく、＜耐えられないことから逃げるのは、預言者たちのスナナの一つである＞というのに従い、逃げるのを選択して、衝突しながら後退して逃げた。クルグズたちはタグリクとともに後ろに入り、激しく突撃したので、多くの人が殉教した。〔王子たちは〕少数の者とともに縁辺に身を移した。装備、旅の糧食、天幕を投げ捨て、多くの人が傷を負い、幾人かは馬に矢が刺さって徒歩のまま、幾人かは足を引きずり、千の苦難のはてカシュガルに帰還した。クルグズたちの幾人かはウシュ軍にも加わず、この者たちがカシュガルにたどり着くまで盗賊行為をなし、〔自分の〕<sup>72)</sup>氏族 (uruq)<sup>73)</sup>のもとに去った。

## 詩

百万の土がクルグズの生命にとって石となれ  
 そのすべての種子に、家財に火が降りかかりますように  
**[p. 142 / fol. 71b]** そなたは親しくするな。その親交はないのである  
 約束と協定はどのように果たされるのか  
 神に、あるいは、世の人びとにどのように恥じ入るのか  
 その者のイスラームと信仰を、そなたは認めるな  
 盗みや追いはぎの腕前が、その敬虔な行いであった  
 高利貸しも、その貧しいスルターンにとって美德  
 親交はその敵である。親切はその人殺し  
 ある者を略奪し、その客人に迷惑をかける  
 まさにこの特質において誠実な部族はいくらかいるのか  
 そなたの悪魔、サタンが、彼らのしたことに恥じ入る<sup>74)</sup>

要するに、ホージャ・ヤフヤー猯下とともにホージャ・ムーミン・ホージャムはこれほどの

70) シャン・ベギについては本書 [p. 128 / fol. 64b] 「日本語訳注 (5)」40 頁の注 105 参照。

71) Tagliqqa. Or. 9660, fol. 79b による補遺。

72) öz. Or. 9660, fol. 80a; Or. 9662, fol. 93b による補遺。

73) Or. 9660, fol. 80a では「天幕 (otaq)」。

74) ‘ār äylär. D126 は du‘ā äylär (祈願する) と記すが、Or. 9660, fol. 80a による。

大軍とともに来て、少数の軍に敗北を喫して戻ったことを不名誉に思い、仕方なく、カルタ・ヤイラグ<sup>75)</sup>を経てファイザーバード<sup>76)</sup>に来て、ヤフヤー・ホージャム猯下がヤルカンド軍を率いてヤルカンドへ進んだ。ホージャ・ムーミンはカシュガル軍を率いてカシュガルへ進んだ。どちらも一人ずつ家僕を急行させた。ホージャ・ムーミンはカシュガルに入り、ホージャ・アブド・アッラー猯下<sup>77)</sup>と会い、起きた出来事を説明した。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムのほうはかなり動揺し、手で膝を叩き、怒りのあまりシャーディヤーナ (šādiyāna)<sup>78)</sup>の一節 (faṣl) を演奏した<sup>79)</sup>。

【p. 143 / fol. 72a】さて、[ホージャ・]<sup>80)</sup>ヤフヤー[・ホージャム]<sup>81)</sup>猯下はヤルカンドに到り、ホージャ・ジャハーン・ホージャムに会い、起きた出来事を説明した。ホージャム・パーディシャー猯下 [=ホージャ・ジャハーン・ホージャム] はあまり動揺せず、「今、我々への神の運命づけは、まさにこのとおりである」と言って彼らを慰め、賜衣を与えた。皆は、「おお、世界の帝王よ、ムンキ氏族 (uruğ) の天幕 (otaq) に留まっているクルグズたちを捕まえて拘束し、その財産を略奪することが先決である」と言った。それで (ersä), ホージャム・パーディシャー猯下の許可により、部下に命令が下された。すなわち、「クルグズたちは多くの奉仕をしている。我々はその子孫に賜衣を与え、客人にする」と言って呼んで来た。四百人の好戦的な騎手をオルダ(宮廷)に閉じ込めて鎖枷で拘束し、軍が行ってその天幕を<sup>82)</sup>略奪した。その若干の者は手中に入った。若干の者は逃げて避難した。大部分は山に身を移し、ヤルカンドの荒野で盗賊行為を始めた。バハードゥル・ベグの子供たちをも捕えて拘束した。カルガリクのハーキム、ミール・ニヤーズ・ベグの者ども (afṛād) は逃げ去った。

さて、この拘束されたクルグズたちは泣きあって次のように申し上げた。「おお、世界の帝王よ、これはなんと不面目なこと (yüzi qaraliq) であるのか。すなわち、我々は使徒の子孫 [=ホー

75) カルタ・ヤイラグはカシュガル市街地の東北東およそ 70km に位置する Kalta Yailak Bazar に当たる。

本書 【p. 87 / fol. 44a】「日本語訳注 (4)」89 頁、注 51 参照。

76) ファイザーバードはカシュガル市街地の東方およそ 67km に位置する町。本書 【p. 32 / fol. 16b】「日本語訳注 (2)」94 頁、注 23 参照。

77) ホージャ・ジャハーンの弟ユースフ・ホージャムの長男 (本書 【p. 69 / fol. 35a】「日本語訳注 (3)」48 頁)。

78) シャーディヤーナ (šādiyānā) には「勝利、成功などを祝福するために演奏される祝賀の音楽、喜びのメロディー」、「ウイグル民間楽曲の一つの名」の意味がある (『維吾爾語詳解辞典 縮印本 (維吾爾文)』烏魯木齊:新疆人民出版社, 1999 年, 683 頁、『維漢詞典』烏魯木齊:新疆人民出版社, 2000 年, 700 頁)。

79) Or. 9662, fol. 94a は「演奏させた (čaldurdlar)」と記す。

80) H̄vāja. Or. 9660, fol. 80a; Or. 9662, fol. 94a による補遺。

81) H̄vājam / H̄ōjam. Or. 9660, fol. 80a; Or. 9662, fol. 94a による補遺。

82) otağīnī. D126 は AVRTAĞYNY と綴るが、Or. 9660, fol. 80b; Or. 9662, fol. 94b の AVTAĞYNY による。

ジャたち)を裏切り、現世と来世において拒否されるであろう。我々の幾人かのごろつきの悪党がこの事をしている。我々は彼らにうんざりしている。神〔も〕うんざりしている。我々が彼らを【p. 144 / fol. 72b】罰しよう。ヤルカンドの山にいて盗賊行為をしている我々の者たちをも捕まえて来て、罰しよう。他の者たちに戒めとなろう」と言って、だまし欺き、本当のように泣き、約束、『クルアーン』の誓いをして、ホージャム・パーディシャー猥下を離れさせ〔た〕。〔その場に残った者<sup>83)</sup>は〕このけがれた者たち〔=クルグズたち〕の言葉を本当と思い、「もし、あちらが『クルアーン』により行動するならば、我々もそうしよう」と〔クルグズたちを〕解放してやり、クルグズたちの物のうち、ヤルカンドの人びとの手に入っていた物は何でも渡してやり、「私は我が塩に、我が父祖たちにまかせた<sup>84)</sup>」と言って、クルグズたちに許可<sup>85)</sup>を与えた。このけがれた者たちは城市の門から出て、盗人行為をしていたが、行って、山の中にいる仲間(ham-rāh)たちに加わって来て、ヤルカンドの諸地域<sup>86)</sup>において盗賊行為をしていた。ムスリムたちは決して平静に〔家から〕顔を出すことができなかった(baš čiqar almadilar)。

ホージャム・パーディシャー猥下はとても動揺した。天に語りかけて言っている。すなわち、「おお、べてん師の天空よ、そなたはカメレオンのように変化して(būqalamūnliq birlä)詐欺にかけた。私はどんな抑圧不正にも耐え忍ぶつもりである。どんな哀しみ悲嘆の出来事の弾雨にも標的となろう。我が同胞、ユースフ・ホージャの服喪が四十日に達してないまま、あちら側の出来事〔についての憶測を〕<sup>87)</sup>私は語ろうか〔いや、語るつもりはない〕。このけがれたクルグズたちの不正迫害を、私は語ろうか。【p. 145 / fol. 73a】この哀しみ悲嘆の時に、我が同胞、ユースフ・ホージャがいたらよかったのになあ。この重い荷を軽くしてくれたのになあ。このような事の救済策を、彼がしていた」と言って、神に頼っていた。

＜我々は天空の主に頼った、そして運命の諸原因を認めた＞

私はそなたに頼った

おお、神よ、すべての哀れな者たちに道案内を

83) おそらく、ホージャ・ヤフヤー・ホージャムであろう。

84) 「我が塩にまかせた」というのは、私が塩(恩恵)を受けた者は、私に恩義を感じて忠誠をつくす、ということであろう。この恩恵に対する義務については、濱田正美「『塩の義務』と『聖戦』との間で」『東洋史研究』52-2, 1993年, 135-138頁参照。なお、本書【p. 90 / fol. 45b】「日本語訳注(4)」92頁に「我々、我が父祖はこの聖域のハーンから塩を食ってきている」、後述の本書【p. 149 / fol. 75a】に「我々はそなたに塩を与えた」という表現がある。

85) ruḡṣat. D126はRVḤṢHと綴るが、Or. 9660, fol. 81b; Or. 9662, fol. 95aのRHṢTによる。

86) ölkälär. D126はAVLKLARと綴るが、Or. 9662, fol. 95aのAVLKALARによる。

87) fikr-i ḥayālīni。Or. 9662, fol. 95a; cf. Or. 9660, fol. 81bによる補遺。

物語の章。聞かなければならない。

ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猯下がイスラーム軍を敗北させ、多くの戦利品で充ち溢れ、装具、天幕、ラクダ、馬、糧食、すべての旅の装備を所有して、喜びに満ち栄光の王座に確乎となった日に、その家僕、属人たちはその事を奇蹟とみなし、その信仰心が増した。

詩

運が助けとなるならば、〔それは〕ダルヴィーシュをスルターンにした  
毎日、〔一〕日以上の栄光を豊富にした  
昇る諸星がある者に援助するならば  
たとえそれが弱き蟻であっても、それをスライマーンにした  
国の王〔を〕王中の王にすれば、身体に魂が  
むしろ魂が身体を上回って、魂に恋人をつくった  
〔昇る運が突然、ある者から顔をそむけるならば、  
たとえ彼が世界の王といえども、家を荒廃させた〕<sup>88)</sup>  
誠実な者よ、この運の王座すべてから心を断ち切れ  
瞬間に王を貧者に、貧者を王にした

**[p. 146 / fol. 73b]** さて、ホージャ・ブルハーン・アッディーンにアブド・ワッハーブ、ホージャ・スィー・ベグは次のように得策を示した。「我々は、このやって来た軍を敗北させた。今や、得策は次のとおりである。我々が引き続いて背後から追っていくならば、我々がカシュガルに行くならば、彼ら〔=カシュガルの人びと〕は〔我々の〕弟子・信奉者であり、我々に援助する。戦闘せずに、カシュガルは征服される。もし今回、行かないならば、後に行って簡単に手に入ることはない。我々はカシュガルを手に入れるならば、ヤルカンドの事も容易である」と言った。この忠言はホージャ・ブルハーン・アッディーン猯下にとって非常に望ましいものとなった。即座に「すべての人びとはカシュガルへ出立せよ」と命令を出し、全軍が〔戦利品である〕ヤルカンド軍の装具、天幕、糧食を携えて行軍の支度をした。

物語の章。カシュガルについて聞かなければならない。

ホージャ・ムーミンが敗北を喫してきた後、国の中で騒動や扇動的な事が生じ始めた。「ホー

---

88) Baht-i tāli' kimsādin i'rāq qīlsa nā-gahān, garči ol sāhī jahān dur hāna vīrān āylāmiš. Or. 9660, fol. 82a; Or. 9662, fol. 96a による補遺。

ジャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムが来るらしい」と四方から人々が出迎えに向かった。阻止しても、うまくいかなかった。一人を押しとどめても、十人が向かった。幾人かを叱責しても、〔密かに行った〕<sup>89)</sup>。それを連れ戻そうとしても、公然と出て行った。どのようにしても、阻止することは、うまくいかなかった。

〔かつて生前〕ユースフ・ホージャム・パーディシャー殿下は、ホージャ・ハサン・【p. 147 / fol. 74a】ホージャム殿下 (Ḥaḍrat-i Ḥōja Ḥasan<sup>90)</sup> Ḥōjam)<sup>91)</sup> <彼の秘奥が神聖になりますように><sup>92)</sup> の弟子のうち、ムッラー・マスジド・アーホン (Mullā Maṣjīd Aḥvun)<sup>93)</sup>、ムッラー・ナウルーズ・アーホン (Mullā Navrūz Aḥvun)<sup>94)</sup> をはじめとする門弟たちのもとに、クバード・ミールザー (Qubād Mīrzā) のもとに、ダルヴィーシュ・ブカーウル (Darvīš Bukāvul) をアンディジャンに派遣していた<sup>95)</sup>。この者たちは〔ユースフ・ホージャムの〕書状に同意して、ダルヴィーシュ・ブカーウルに同行して〔カシュガルに〕来ていた。この者たちは城市に入り、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムに会い、〔ユースフ・ホージャム逝去の〕哀悼のため『クルアーン』をすべて朗詠し、悲しみ泣きあった。苦難がよみがえった。その後、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはこの者たちに恩寵を示し、「そなたたちは各々、自分の弟子・信奉者たちを連れて、城市の城壁に、・・・に<sup>96)</sup> いるように」と命じた。〔クバード・ミールザーを出迎えるために贈り物を持たせて家僕を向かわせた〕<sup>97)</sup>。そして、幾人かの者たちに出発の準備をさせた。

さて、さらにムッラー・マジード (Mullā Majīd)<sup>98)</sup> というアーホンがいた。ユースフ・ホージャム・パーディシャーはこの者を自分の子よりも優れているとみなし、宮廷の小姓たち (orda

89) pinhān bardī. Or. 9662, fol. 96b による補遺。Or. 9660, fol. 82b では pinhān bara dur。

90) D126 は ḤSYN と綴るが、Or. 9660, fol. 82b; Or. 9662, fol. 96b の ḤSN による。

91) このホージャ・ハサン・ホージャムは、アーファーク派のホージャ・アーファークの息子（または孫）にあたる可能性が高い。本書【p. 116 / fol. 58b】「日本語訳注 (5)」29 頁、注 41 参照。

92) Quddisa sirruhu. Or. 9660, fol. 82b; Or. 9662, fol. 96b による補遺。

93) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 111b; D191, fol. 125a; cf. ms. 3357, fol. 172b は Aḥvund Mullā Maṣjīdī と記す。

94) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 111b; D191, fol. 125a; cf. ms. 3357, fol. 172b は Aḥvund Mullā Navrūzī と記す。

95) 本書【p. 115 / fol. 58a】～【p. 117 / fol. 59a】「日本語訳注 (5)」28-29 頁において、ユースフ・ホージャム・パーディシャーがダルヴィーシュ・ブカーウルをアンディジャンに遣わし、そこのハーキムたち、クルグズのクバード・ミールザー、ホージャ・ハサンの門弟であるアーホン・ムッラー・マスジディーとアーホンド・ムッラー・ナウルーズィーに書状を送ったことが述べられている。

96) FYLALLARDH (・・・larda / lārdā)。FYLAL の読みと意味を解し得ない。

97) Qubād Mīrzānī istiqbālīga piš-kašlar birlā ḥādimplārni ravān qıldılar. Or. 9660, fol. 83a; cf. Or. 9662, fol. 97a による補遺。

98) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 111b; D191, fol. 125b; cf. ms. 3357, fol. 173b はアーホンであると述べていないものの、名を ‘Abd al-Majīd と記す。

ušaqlari) の長にしていた。この恩知らず [=ムッラー・マジード] はすべてのアミールたちに不誠実の策を授けた。この者は皆より先に変心した。クバード・ミールザーのもとに行き、そそのかしてクバード・ミールザーを正道から踏み外させた。とても道理にかなったように道を示して言った。すなわち、「今や、世界は彼ら [=ホージャ・ブルハーン・アッディーンたち] を見守った。こちらの者たち [=ホージャ・アブド・アッラーたち] に彼らと対抗する力はない。こちらの者たちは、今や、出て行って難を避ける。ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムはそなたをカシュガルのハーキムにする」と言って、だまし始めた。

ところで、この<sup>99)</sup> クルグズたちはムッラー・マジード、[p. 148 / fol. 74b] 不当利得者の言葉を聞き (ḥarām-ḥürniḡ sözi birlän), ホージャ・アブド・アッラーの家僕たちに、「我々はこの二人のホージャたちのどちらにも敵ではない。どちら側にも矢を射ない。へりに退いている」と言って返事した。家僕はこの返事を聞いて、[ホージャ・アブド・アッラー・] <sup>100)</sup> ホージャムに伝えた。ホージャムはクバードのこの返答の誓いを聞いて失望し、兄弟たちを見つめて次のように言った。「我々の前に生じているのは何と難しいことであるのか。我々に降りかかっているのは何という悲哀心痛なのか。我々の父の不幸からまだ四十日に達しないで、何という災難が起こったのか。一つの望みがクバードというクルグズにあった。[しかし] 彼も変心した。確かに我々は、来ているカルマクたちと一二期、頭をつきあわせて (kalla bar kalla) 戦いあうことのないまま城市を明け渡せばよかった。今、我々は『戦おう』と言っても、軍を信頼できない。カシュガルの人びとはすべて彼ら [=ホージャ・ブルハーン・アッディーンたち] の弟子・信奉者である。むしろ、我々を捕まえ渡すことを決してやめない」と言って困惑していた。

ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍がアルトゥチュ <sup>101)</sup> に到ったという知らせが届いた。この知らせを聞き、国の人びとは皆、出迎えようとしていた。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下には、統治の王座に坐っている力が残っていなかった。この状況においてムッラー・マジードという離反者 (rāfiḡī) は [p. 149 / fol. 75a] 宮廷の家僕たちにより言って寄こした (orda ḥādimlarīdīn aytīp kīgürdi)。すなわち、「ホージャ・アブド・アッラー猊下は統治の王座を、今、空にして渡せ。王座の主人が来た。カシュガルのすべての人びとの目的は、まさにそれである。さもなければ、ご自身に危険がおよぶ」と。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下はその言葉を聞いていた。彼自身 [=ムッラー・マジード] はテュメン (Tümän) の河岸にある空き地 (šibr) にいて、柱廊 (riwāq) に向かって呼び掛け、大きな声で言った。すなわち、「おお、我が王子たちよ、今、留まっている意味はない。この国の主人が来た。今、[ホージャ・

99) bu. D126 は bular と記すが、Or. 9660, fol. 83b; Or. 9662, fol. 97a による。

100) Ḥvāja ‘Abd Allāh. Or. 9660, fol. 83b; Or. 9662, fol. 97a による補遺。

101) Or. 9660, fol. 84a; Or. 9662, fol. 97b は同一地点であるが、Ārtūš と記す。

アブド・アッラーが] 出て行って [国を] 渡すようにせよ」と、うそぶいた (kafšidi)。ホージャム [=ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム 狛下]<sup>102)</sup> も柱廊にいた。その手に弓矢<sup>103)</sup> を持ち、何回か弓を引いた。この者 [=ムッラー・マジード] も一つの場所に落ち着かず、歩き回っていた。[ホージャム 狛下は]<sup>104)</sup> さらに我慢して、「おお、ぺてん師よ、そなたはこの不誠実なことを我々に対して行っている。我々はそなたに塩を与えた。[そなたが]<sup>105)</sup> 我々にしたことを、そなた自身はある者のせいにする<sup>106)</sup>」と言って、嘆息した (nafas ketti)。その後、その [=ムッラー・マジードの] 家族を捕虜にし、金銭<sup>107)</sup> を略奪して彼自身を殺した。

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはどのような方法で留まれるのか考え付かなかった。[カシュガル]のハーキム、フシュ・キフェク・ベグ (Hwuš Kifak Beg) に得策を尋ねた。彼は次のように言った。「おお、世界の帝王よ、得策は次のとおりである。ここに留まる場所はない。[そなたの者たちに] 今、以前のような幸運成功がある<sup>108)</sup> と想像させないように。[p. 150 / fol. 75b] もし、旅するならば、決してヤルカンドの方に行かせないように。そこで命を救うことはできない。ヤルカンドも衰亡にさらされている所である。もし、仮定としてこの者たち [=敵たち] の手中に落ちたならば、[敵たちは] 殺害から手を引かない。より好ましいのは次のとおり。[そなたの者たちを] アンディジャンの方に出立させるように。我々も仕えて一緒に行くならば [よいでしょう]。[敵たちは] 我々に用心してヤルカンドに軍を率いることはできない。各人がこの集団 [=敵たち] の手中に落ちても、その殺害を引き止めることになる」と言って、強く導いた。

## 詩

今や、喜びは去った。流浪の時、別離の悲しみ  
 城市<sup>109)</sup> と家を放棄して出立せよ、シャーム、イラクへ  
 不誠実にも下界へ、恥知らずな者の時である  
 この集団とともにテラスと柱廊を捨てさせよ

102) Ḥaḍrat-i Ḥvāja ‘Abd Allāh Ḥvājam. Or. 9660, fol. 84b による補遺。

103) oq yār. D126 は yār を YA と綴るが、Or. 9660, fol. 84b; Or. 9662, fol. 98a の YAR による。

104) Ḥaḍrat-i Ḥvājam. Or. 9660, fol. 84b による補遺。

105) qilganlarini. Or. 9660, fol. 84b; Or. 9662, fol. 98a による補遺。D126 は qilganlarni と記す。

106) この一文の訳語は確実ではない。D126 は Bizgā qilganlarni özün birgā un tartar sen, Or. 9660, fol. 84b は Bizlārgā qilganlarini birgā un özün tartgay sen, Or. 9662, fol. 98a は Bizgā qilganlarini birini un tartursun と記す。

107) ful māl. ful は pul の訛音とみなす。D126; Or. 9660, fol. 84b の綴り、FL による。

108) D126 は yoq-tur, Or. 9662, fol. 98b は yoq と記すが、Or. 9660, fol. 84b の dur による。

109) šahr. D126 は šāh と記すが、Or. 9660, fol. 85a; Or. 9662, fol. 98b による。



この統治の王座は幾人かの王を失望のまま過ごさせた  
 我々から通り過ぎようと、留まろうと、他の者を熱望させよ  
 何年か我々は喜びとともに歓喜を楽しんだ  
 悲しみの毒を飲め。大言壮語に注意せよ  
 何種類もの苦難、種々の出来事  
 中国人やカルマクやクルグズ、カザーク (Qazāq) が襲撃して

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはフシュ・キフェク・ベグの忠告を聞いて、次のように言った。「おお、ハーキム・ベグよ、そなたの忠告はとても道理にかなっている。しかし、高貴なる父方のおば、保護者、我が父祖を打ち捨て<sup>110)</sup>、ある方面に **[p. 151 / fol. 76a]** 出立することは望ましくない。今、我々がその方面に出て行くならば、彼らは我々に満足しない。我々は、我が父祖<sup>111)</sup> を満足させ全世界の帝王となってから、我が父祖<sup>112)</sup> の満足を得て死ぬならば、それは両世界の榮譽である」と言ってフシュ・キフェク・ベグと別れ、その夜、自分の特別な家僕を集めて旅の用意をし、腹心の友たちに別れを告げて横門 (yan işik darvāzasi)<sup>113)</sup> を通り、騎兵随員 (ḥayl ḥašam<sup>114)</sup>) を連れてヤルカンドの方へ向かった。

さて、ユースフ・ホージャムの逝去から四十日の二日前になっていた。日に十人が泊まって、アルトゥンルク・サライ (Altunluq Sarāy, 「黄金の宮殿」) の通廊 (dālān) にある小部屋 (ḥujra) で『クルアーン』を詠んでいた。この夜も、そこで『クルアーン』を詠んでいたらしい。門には鍵がかけられていたらしい。翌朝、日が出るまで〔朗詠に〕飽くことを知らなかった。さて、強盗たちは〔ホージャ・アブド・アッラー・〕ホージャムが〔オルダから〕<sup>115)</sup> 出て行った〔まさにその時〕<sup>116)</sup> オルダに駆けて行った。どの建物も手つかずのままには置かれなかつ

110) ‘amma-i šarīf qibla-gāh babamni tašlap. babam は Or. 9662, fol. 99a の BABAM による。D126 は BABAQAM と綴る。Or. 9660, fol. 85a-b は babam の箇所を bubam (<BUBAM) と記し、続けて「ホージャ・ジャハーン・ホージャムをヤルカンドに打ち捨て」と付け加えている。なお、A グループ写本は ‘amma の箇所を ‘amm (父方のおじ) (Turk d. 20, fol. 114b; D191, fol. 128a; ms. 3357, fol. 178a), babam の箇所を BABAKAM (Turk d. 20, fol. 114b), BABAM (D191, fol. 128a), BBAKAM (ms. 3357, fol. 178b) と記す。

111) D126; Or. 9662, fol. 99a は BABAKAM, Or. 9660, fol. 85b は BVBAKAM と綴る。なお、A グループ写本の D191, fol. 128a は BABAM, ms. 3357, fol. 178b は BABAKAM と綴る。

112) babam. D126 は BABAM, Or. 9660, fol. 85b は BBAM, Or. 9662, fol. 99a は BVBAKAM と綴る。

113) yan işik は門の名であるかもしれない。本書 **[p. 81 / fol. 41a]** 「日本語訳注 (4)」84 頁では、オルダ (宮廷) に入る門として記されている。

114) D126 は ḤŠM と綴るが、Or. 9660, fol. 85b; Or. 9662, fol. 99a の ḤŠM による。

115) ordadin. Or. 9660, fol. 85b による補遺。

116) hamān. Or. 9660, fol. 85b による補遺。

た (tāza qalmadı)。ついに〔強盗たちは〕この小部屋の扉を開けていた。このアーホンたちは、オルダが荒廃しており、強盗たちの手に棍棒<sup>117)</sup> [があるのを] 見た。彼らは恐れて、どうにか逃げ出た。〔強盗たちは〕『クルアーン』の三十分の一の冊子 (sīpāra<sup>118)</sup>) を強奪して去った。現在、そのアーホンたちの一部が生き残っている。「まだ我々は今にいたるまで怯えている」と語っている。

さて、〔ホージャ・アブド・アッラーがカシュガルから出て行ったことに〕気づいた人々が世間に満ち溢れた。フシュ・キフェク・ベグは家族 [p. 152 / fol. 76b] と騎兵随員とともに出立した。ス門 (Sū Darvāzasi) の前に〔彼の〕<sup>119)</sup> 屋敷 (ハウリ) があつた。そこに行ってから立ち去ることになった<sup>120)</sup>。アブド・アルマジード (‘Abd al-Majīd) はクルグズたちとともに道を遮って攻撃し、この寄る辺なき者たちを深い谷間に閉じ込め、そのすべての持ち物を取った。彼自身 [=フシュ・キフェク・ベグ] は夫人や十人に近い者とともに逃げ去り、アンディジャン方面に回避した。アズィーム・シャー (‘Azīm Šāh) という名の息子が洞窟の穴に隠れていた。この不正な者たちは見つけて、ホージャ・ブルハーン・アッディーンへの贈り物とした。彼は殺された。

アブド・アルマジードは喜びの太鼓をたたかせ布告している。城市の人びとは世が変わっているのを知った。翌朝、アブド・アルマジードは頭に羽根飾りをさし<sup>121)</sup>、オルダの中庭にいて、

117) ğolda. 但し, ĞVLDY と綴られている (D126; Or. 9660, fol. 85b; Or. 9662, fol. 99b; Turk d. 20, fol. 115a)。Muhāmmād Sadiq Qāšqāri, *Tāzkirā’i ‘Azīzan*, Nāširgā tāyyarlıgūci: Nijat Muħlis, Šāmsidin Āmāt, Qāšqār Uyğur Nāširiyyati (穆罕麦提·萨迪克『和卓伝 (维吾尔文)』喀什维吾尔文出版社, 1988年) 243頁参照。

118) sīpāra は日々の読誦のために『クルアーン』を 30 に分割した 1 区分。

119) ḥavlisi. Or. 9660, fol. 86a による補遺。D126 は havli と記す。

120) Šunda barīp ketmākkā ketip barur erdi. この一文の訳語は確実ではない。

121) bašīga otaġāt sančip. otaġāt (<AVTAGAT) は otaġa (<AVTAGH) のアラビア語方式の複数形であり (Wilhelm Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, Mit einem Vorwort von Omeljan Pritsak, ‘s-Gravenhage: Mouton & Co, 1960, vol. 1, p. 1105), A グループ写本の Turk d. 20, fol. 115b; D191, fol. 128a; ms. 3357, fol. 178a は otaġa (<AVTAGH) と記す。『パープル・ナーマ』に同じ表現の文面があり (間野英二『パープル・ナーマの研究 I 校訂本』京都: 松香堂, 1995年, 321頁, 1行目, 間野英二『パープル・ナーマの研究 III 訳注』京都: 松香堂, 1998年, 323頁), 羽飾りは青さぎ(?) の羽毛で作られていた (同上『校訂本』221頁, 6行目, 同上『訳注』224頁, 間野英二『パープル・ナーマ 2——ムガル帝国創設者の回想録』東京: 平凡社, 2014年, 71頁)。ティムール朝時代の細密画には、しばしば、ターバンに羽根飾りを挿した貴人たちの姿が描かれており、また、モンゴルの王族・貴人らが頭に羽根飾りをさして居並ぶ情景は、モンゴル時代の祝宴(トイ)を描いた細密画などに常に見られる (同上『訳注』255頁, 注411, 323頁, 注782)。また、頭に羽根飾りをさすのは、モンゴル時代からの礼装であろうという (同上『訳注』323頁, 注782)。

おこなった行動を自慢していた。アーホン・ムッラー・マフムード (Āḥvun Mullā Maḥmūd)<sup>122)</sup> は密かに、「おお、離反者 (rāfiḍī) よ、今、そなたは急いでいる。そなたに何が生じているのか」と言っていた。

結局のところ、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムがカシュガルに入った。統治の王座に確乎となって坐した。カシュガルのなかで大きな混乱が生じた。大部分の人びとはカラタグ人 (Qarataḡī < QRATAḠY)<sup>123)</sup> と呼ばれて殺された。〔狂気で唾者のスーフイーたちは最大限の信用を得た〕<sup>124)</sup>。その者たちに対し、国の人びとは大きな不安を心に抱いた。また、生計、天命にも〔不安を抱いた〕<sup>125)</sup>。一部の者は恩知らずであったことを後悔して卑下した。

また、アブド・ワッハーブ、【p. 153 / fol. 77a】永遠に不幸な人が次のように忠告した。「引き続き軍がヤルカンドのほうに堂々と進むならば、かのホージャたちに猶予を与えずに行くならば、容易に城市は征服される。そうでなく猶予を与えるならば、方策が講じられ、事は困難になり始める。軍が速やかに行くことが最も好ましい」。そして、この忠告はホージャ・ブルハーン・アッディーン猥下にとって望ましかった。即座に兵が集合し、ヤルカンドのほうへ出立した。クバード・ミールザーがホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猥下を出迎えに行き、奉仕のベルトを腰にしっかりと締めた。この者には、ヤルカンド<sup>126)</sup>が征服された後、カシュガルのハーキム職を〔与える約束を〕<sup>127)</sup>して、軍の総司令官 (sipah-sālār-i laškar) にしてヤルカンドへ出立する〔よう命令した〕<sup>128)</sup>。このように、クバード・ミールザーを長とするクルグズたち、アクス軍、〔カシュガル軍〕<sup>129)</sup>、ウシュ軍、六百人のカルマク、二百人の中国人が・・・<sup>130)</sup> 壮麗に (dabdaba birlā) ヤルカンドへ向かった。

物語の章。ヤルカンドについて聞かなければならない。

122) カシュガルのアーラム (a'lam, 最上位の学者) である (本書 【p. 106 / fol. 53b】「日本語訳注 (4)」105 頁)。

123) Or. 9662, fol. 100a は Qarataḡlīq (<QRATAḠLYQ) と記す。字義はいずれも「黒山党, 黒山人」であり、ホージャ・アブド・アッラーたちの党派 (イスハーキーヤ) を指していよう。

124) Ol ki dīvāna ḥaras šūfīlar awj-i i'tibār tapīlar. Or. 9660, fol. 86b; cf. Or. 9662, fol. 100a による補遺。

125) 補遺の「不安を抱いた」は確実ではない。D126 は Ham ma'āš qadarlik, Or. 9660, fol. 86b; Or. 9662, fol. 100a は Ham ma'āš qadarlik boldī と記す。

126) D126 は Kāšqar と記すが, Or. 9660, fol. 86b; Or. 9662, fol. 100b の Yārkaṇd に従う。

127) bermākā va'da. Or. 9660, fol. 86b による補遺。

128) farmān qīldī. Or. 9660, fol. 86b; Or. 9662, fol. 100b による補遺。

129) Kāšqar laškari. Or. 9660, fol. 87a; Or. 9662, fol. 100b による補遺。

130) D126; Or. 9660, fol. 87a は 'Ş'ŞH, Or. 9662, fol. 100b は 'M'MH と綴るが、読みと意味を解し得ない。

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム、ホージャ・ムーミン・ホージャムが従者たち (ta'alluqāt), 騎兵随員とともにヤルカンド〔城市〕に入った日に、ホージャ・ジャハーン猊下く彼の秘奥が神聖になりますように>の心はヤルカンドの統治の王座から離れ、〔猊下〕は、天幕の宮廷<sup>131)</sup>を城市の外に建てるよう命じた。すべての家族や騎兵随員とともにそこに出て、確乎となった。ヤルカンドのすべての【p. 154 / fol. 77b】ウラマーや〔アミールたち〕<sup>132)</sup>賢人たち、すべての老若たち (uluġ ušaqlar) を集め、客もてなしをして次のように言った。「おお、門弟たち (yārānlar) よ、次のことを知っておくように。我々がそなたたちを統治して何年にもなる。国の秩序のために我々から意図的に、あるいは誤って苦難が生じているならば、そなたたちは〔そのことを〕見逃すか、あるいは、復讐するように。今まで、そなたたちから不誠実や背信は我々に対して少しも行われていない。我々は満足している。そなたたちの国 (yurt) は榮えるであろう。要するに、この満足により目的は次のとおりである。すなわち、ホージャ・アーファーク猊下の子孫であるホージャ・ブルハーン・アッディーンがお越しになっている。シナ皇帝、アムルサナーの援助を得てカシュガルの境にいたるまで征服している。ヤルカンドにも来そうである。もし彼らと戦うならば、双方のムスリムたちにとって暴虐となる。もし服従するならば、我々は、<神に称賛あれ>、イスラームである。彼らはカーフィル (不信仰者) たちと混じりあっている。イスラームから〔離れ〕不信仰に属することは適切ではない。また彼らは〔我々を〕信じず、結局、劍をふるう。適切なことは次のとおり。我々が子孫とともに〔メッカの〕カアバを参詣すれば〔よかろう〕、<神が望まれるならば>。私の心には、以前から大巡礼 (hajj) の願望があった。彼らの父祖たちがこれらの国を支配するならば、我々の父祖たちは出て行った。我々の父祖たちが王座に坐れば、彼らが出て行った。【p. 155 / fol. 78a】今いくらかの期間、我々がこの国 (mamlakat) の統治の王座において成功した。今や、彼らの順番である。誰でも自分の望みをかなえることがより良い。そしてまた、天空の最も幸運な星 (木星) はあちら側に、不吉<sup>133)</sup>は我々の側に〔あるのが〕明らかである。我々は自分自身に、そしてまた他の者に圧迫を加えないで出ていくほうが良い」と言っていた。

一時のち、ウマル・バーキー・アーホン (‘Umar Bāqī Āḥvun) 〔をはじめとする〕<sup>134)</sup>ウラマーたち、ガーズイー・ベグをはじめとするすべてのベグたちが次のように言った。「おお、世界の帝王陛下。そなたから別れて〔しまうと〕、我々にとってこの世は不法 (ḥarām) である。もし旅を選ぶならば、ヤルカンドのすべての民を同行させよ。彼ら〔ホージャ・ブルハーン・アッ

131) Or. 9662, fol. 100b では ḥayma の語末に符号のハムザが付されているので、ḥayma-yi bārgāh と読む。Or. 9660, fol. 87a は「天幕と宮廷」(ḥayma vā bārgāh) と記す。

132) umarā. Or. 9660, fol. 87a による補遺。Or. 9662, fol. 101a は ‘MRA と誤記する。

133) nuḥūsat. D126 は NḤVST と綴るが、Or. 9660, fol. 87b; Or. 9662, fol. 101b の NḤVST による。

134) bašliġin. Or. 9662, fol. 101b による補遺。

ディーンたち] は決してこの地に足を踏み入れない。カシュガルを取ることで満足する。以前からこの者たちの父祖たちはカシュガルに満足していた。それ故にカシュガルを埋葬の場所と認め、その父祖たちがそこに横たわっている。猯下の父祖たちはヤルカンドに横たわっている。その偽善者たちを我々にまかせよ。我々が罰しよう。我々には彼らについて嘔吐すべきことはない<sup>135)</sup>。死ねば殉教者、殺せば聖戦士(ガーズィー)。もし我々に百の生命があるとしても、[それはすべて] イスラームへの捧げ物となろう。我々は小刀で切り合い、かかえ合って死ぬ。このような大志のある者を捨てて行くことは聖法の命令において正当であるのか」と言い、約定、『クルアーン』の誓いを新たにして、旅に出るのを阻止した。

ホージャ・ジャハーン・ホージャム **[p. 156 / fol. 78b]** 猯下は聖法の命令を仲立ちにした (dar miyān qilgandin) 後、いかなる救済策も採り得ず、留まって運命に同意し、再び城市に入った。

詩

私の上に運命から何が来ようとも、私は同意せねばならない  
 世においていかなる事も運命でないものは少しもないだろう  
 もし私に敵の手における死が定めであるならば  
 運命から逃げ救われることは正当であるのか  
 何が私ひとりに私の子孫とともに腰となるのか  
 我々は殉教者とカルバラーの高価な遺産とならねばならない  
 地面も天空も敵となる時が来る  
 もし私が百千の呼びかけをするならば、ひとつの返答も得られないはずだ  
 私の家族のみならず、まるで私の命から過ぎていくように  
 百の出来事が種々様々に百の災難をもたらし  
 おお、サーディク (誠実な者) よ、最高天の王たちの王に達した圧制は多い  
 自身の心は世の人について決して親しむな

ホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下は神を信頼し、荒野の民<sup>136)</sup>を城市に入れ、城塞防備の武器を整え、城壁の櫓<sup>137)</sup>を強固にして準備していた。カシュガルの方から〔軍勢がまきおこす〕土埃の痕跡が現れた (gard az ‘alāmāt-i āšār paydā boldī) との知らせが届いた。ホージャ

135) Bizniñ olardın marāšimız yoq dur。前後の文脈を通じさせることができない。

136) šahrā ḥalqī. D126 は ŞHRA ḤLQ と綴るが、Or. 9660, fol. 88b; Or. 9662, fol. 102b の ŞHRA ḤLQY による。

137) safil sar-kūflarī. D126 は SFYL SR KVFLAR と綴るが、Or. 9662, fol. 102b の SFYL SR KVFLARY による。

ム猯下〔ホージャ・ジャハーン〕は国のすべての仕事を、軍の **[p. 157 / fol. 79a]** 武器をガーズイー・ベグに委ねた。ヤルカンドのすべての〔事〕<sup>138)</sup>は彼により実行された。その後、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムを叱り、突然次のように言った。「某所に敵がいると言って遠くで驚き逃げて来るほどの勇気のなさでよいのか。一、二回〔敵と〕<sup>139)</sup> 攻撃し合って、敵側が非常に強力になっているかいないかという時に、仕方なく難を避けて敗走するのは名誉に関わることはないか。自分たちの勇敢さについて非常に自慢している。〔しかし〕必要な時にまったく役に立たなかった」。特に、この叱責はガーズイー・ベグ〔に対して〕よりもきつかった。ホージャ・アブド・アッラーとともにホージャ・ムーミンは恥じ入って顔を上げることができなかった。

さて、カシュガル軍が群れをなして (fawj fawj aymaq aymaq) 来はじめた<sup>140)</sup>。この来た者たちをヤルカンドから出て捉え捕虜にした。十日目までこのようにしていた。毎日、出て行き、捕虜の数は六百に達した。十一日目に…<sup>141)</sup> 威勢よくホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猯下が来た。〔人々は〕次のように勘定しあった。すなわち、ホージャ・ヤフヤー猯下がウシュから戻って来てから十日後に、ホージャ・アブド・アッラー猯下がヤルカンドにお越しになった。さらに十日後にカシュガル軍がばらばらに初めて姿を現した。その後、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムが来た。ヤルカンドから王子たちをはじめ三千人が出て **[p. 158 / fol. 79b]** 対峙した。ホージャム猯下〔ホージャ・ジャハーン〕はこの者たちに次のように戒告した。すなわち、「彼らから声を十分に聞くまでは、矢を放つことのないように。その後で、聖法の許し<sup>142)</sup>により矢を放つように」と言っていた。それ故に戦列を整えとどまっていた。決して矢を放たなかった。戦場の中へ疾駆 (javalān-bāzliq) もしなかった。

しかし、あちら側の軍が「帰れ、帰れ (qayt qayt)」という声とともに攻撃しようとした。この声を彼らから聞いて、数名の者がホージャム〔猯下〕に良き知らせを届けようと走って行った。誰よりも先にガーズイー・ベグの息子ウマル・ベグがホージャムに知らせた。ホージャムはこの吉報を聞き、感謝の念をささげて次のように言った。「かの人びとが『神 (Allāh)』』という声で戦いを始めるならば、ムスリムたちの側に矢を放つこと<sup>143)</sup>は聖法において正しくは

138) kār. Or. 9660, fol. 88b; Or. 9662, fol. 102b による補遺。

139) duşmanlar birlä. Or. 9660, fol. 88b による補遺。

140) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 119a は「カシュガル軍から司令官なしで分散した軍が群れをなしてヤルカンドに対してやって来ていた (Kāşgar laşkaridin sardärsiz farākanda laşkar fawj fawj Yärkand üzrā kelip turdı.)」と記す。つまり、ホージャ・アブド・アッラーから離れた一部の兵士がヤルカンドに向かって攻撃しに来ていた、ということであろう。

141) ‘Ş‘ŞH の意味と読みを解せない。

142) ruḡṣat. D126 は RVHŞT と綴るが、Or. 9660, fol. 89a; Or. 9662, fol. 103b の RHŞT による。

143) atmaq. D126 は ATMANK と綴るが、Or. 9660, fol. 89a; Or. 9662, fol. 103b の ATMAQ による。

ない<sup>144)</sup>と、私はいくばくかの間、心のなかで懸念していた。今や、そなたたちは戦いから手を引くな。そなたたちは死ねば殉教者、殺せば聖戦士である」と言って戦いの許可を与えた。

さて、ムスリムたちはこの許可を聞き、「おお神よ、おお神の使徒よ」という声で〔右翼を左翼に、中軍を前衛にぶつけ〕<sup>145)</sup>まるで蘆に火がついたように攻撃した。カシュガル人たち<sup>146)</sup>の心に震えが生じた。この者たち〔ムスリムたち〕に対抗する力は全く残っていなかった。特に〔幾人かの王子たちの武勇について、のちに記して称賛する〕<sup>147)</sup>。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム、イナーヤト・ホージャムの勇敢さは誰よりも優れていた。

**[p. 159 / fol. 80a]** さて、イナーヤト・ホージャムはホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下にとって女婿 (dāmād) であった。〔イナーヤト・ホージャムは〕老齢とはいえ、その大望、度胸は若々しかった。「この気高い〔我が〕生涯は過ぎ行きている。最後に我が生涯において聖戦 (gazāt jihād) があったならば、この白いひげを血に染め、我が生命をイスラームの犠牲にしたものだ」と、いつも望んでいた。この戦いが始まるやいなや、その生命は若返り、その一つの大望が千になった。戦場のなかで、まるで〔茂みのなかの〕<sup>148)</sup>ライオンのように疾駆していた。時に鋭い刃の槍、時にきらめく剣、時に弓矢、どんな武器でも状況が有利になるならば<sup>149)</sup>、それを使い、兵士のなかで殺された者により小山を築き、カーフィルたちの軍を驚かせていた。さらに一方からホージャ・アブド・アッラー猯下がカシュガル人たち<sup>150)</sup>をばらばらにしていた。さらに一方からホージャ・ヤフヤー猯下が勇ましい正義を示していた。さらに一方からスイッディーク・ホージャム (Šiddīq Hōjam)<sup>151)</sup>が戦い、自ら敵にぶち当たり、殺された者により小山を作っていた。この四人の勇士は四方からカーフィルたちの軍を殺して世間を驚かすほど戦った。

さて、アミールたちのなかで世界の勇者たち、〔すなわち〕ミールザー・カーシム・ベグ (Mīrzā Qāsim Beg) [と]、アクスのイシク・アガであったミールザー・ムラード・ベグ (Mīrzā

144) nā-durust. D126 は NA DVRST, Or. 9660, fol. 89b; Or. 9662, fol. 103b は NA DVRVST と綴る。

145) maymananī maysaragā qalbñī janāhga soqup. Or. 9660, fol. 89b; cf. Or. 9662, fol. 103b による補遺。

146) Kāšqarīlar. Or. 9660, fol. 89b は Kāšqar ḥalqī と記す。

147) nečā šahzādalarñiñ dil-āvarlikiniñ ta'rīf tawšīflarī kīn kelūr. Or. 9660, fol. 89b; cf. Or. 9662, fol. 104a による補遺。

148) bīša ičidāki. Or. 9662, fol. 104a; cf. Or. 9660, fol. 90a による補遺。

149) yārī bersä. D126 は yārī を BAR と綴るが、Or. 9660, fol. 90a; Or. 9662, fol. 104a の YARY による。

150) Kāšqarīlar. D126 は Kāšqarlar と記すが、Or. 9660, fol. 90a による。なお、Or. 9662, fol. 104b は「カシュガル軍 (Kāšqar lašqarī)」と記す。

151) スイッディーク・ホージャムはホージャ・ジャハーン・ホージャムの子である (本書 [p. 57 / fol. 29a] 「日本語訳注 (3)」36 頁参照)。

Murād<sup>152</sup>) Beg) は、[かつて] ユースフ・ホージャム・パーディシャーがイラから聖戦を意図してカシュガルに来た時にイスラームに援助するため兄弟でカシュガルに来ていた。ユースフ・ホージャムはミールザー・[p. 160 / fol. 80b] ムラード・ベグをカシュガルのイシク・アガにしていた。[今、この兄弟は] 危機的な状況においてアブド・アッラー・ホージャムに同行してヤルカンドに来ていた。さらに弟のミールザー・シールダーク・ベグ (Mīrzā Šīrdāq Beg) がいた<sup>153</sup>)。この三人の勇者の手によりカシュガル軍は窮地に追い込まれていた。

さらに一方からミールザー・アブド・アルワッハブ・ベグ (‘Abd al-Wahhāb<sup>154</sup>) Beg), シハブ・アッディーン・ブカーウル (Šihāb<sup>155</sup>) al-Dīn Bukāvul), ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウル (Muḥammad ‘Abd Allāh Bukāvul), クルグズたちからトゥカル・ミールザー (Tūqāl Mīrzā), ホージャム・ワリー・ドルガ (Hōjam Walī Dōrga), アルース・ミールザー (‘Arūs Mīrzā), 国の人びと (yurt ḥalqī) からも数名の射撃の巧みな戦士<sup>156</sup>) たちが疾駆して大いに殺戮した。幾人かを傷つけて馬を奪い、カシュガル軍を一ファルサング<sup>157</sup>) 後方へ退け、勝利して城市に入り、ホージャ・ジャハーン猊下<彼の秘奥が神聖になりますように>のもとに至り、敬意を表した。ホージャムはこれらの者に良き祈りをした。

皆は、「外の軍は少ないようだ。明日、我々は軍を集めて<sup>158</sup>) 出て行き、カーフィルたちの軍を埃のように蹴散らそう (habā’an mansūran äylägäy miz)」と申し上げた。このような考えであった。しかし、オルダ (宮殿) の屋上 (orda ögzäsi) から、城市の城壁から外を物見して、軍が

152) D126 はこの箇所を MRD と綴るが、Or. 9660, fol. 90b の MRAD による。

153) この三兄弟について、本書 [p. 117 / fol. 59a] 「日本語訳注 (5)」30 頁に「アクスの金庫係りのミールザー・カースィム・ベグという者がおり、ミールザー・ムラード・ベグ (Mīrzā Murād Beg), ミールザー・シールダーク・ベグ (Mīrzā Šīrdāq Beg) という二人の弟がおり、[彼らは] 一門の弟子 (ムリード) の出であった」と述べられている。

154) D126 は ‘BDV ALVHAB と綴るが、Or. 9660, fol. 90b の ‘BD ALVHAB による。

155) D126 は ŠHAV と綴るが、Or. 9660, fol. 90b; Or. 9662, fol. 105a の ŠHAB による。

156) mubārīz. D126; Or. 9660, fol. 91a; Or. 9662, fol. 105a は MBARYZ と綴る。

157) Muhämmäd Sadiq Qāšqāri, *Tāzkirā’i Āzizan*, Nāšīrgä täyyarlıgūci: Nijat Muḥlis, Šāmsidin Āmät, Qāšqār Uyğur Nāšīriyati (穆罕麦提·薩迪克『和卓伝(維吾尔文)』喀什維吾尔文出版社, 1988 年) 264 頁, 注 1 によれば, 1 ファルサフ [ファルサング] は 7km に等しいという。なお, Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kāshghar and Yarkand)*, Part 2: Vocabulary, Turki-English, Calcutta, 1880, p. 63 によると, ファルサフはタシュ (tash) と等しく, 約 5 マイル (8.05km) に相当する (堀直「18~20 世紀・ウイグルの度量衡について」『大手前女子大学論集』第 12 号, 1978 年, 60 頁参照)。ただし, 1 タシュを約 4 マイルとする説明もある (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tāzkira-i-Khwājagān of Muḥammad Šādiq Kāshghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, 1897, p. 52, footnote 42)。

158) jam‘ äylāp. D126 は jam‘ を JM‘Y と綴るが、Or. 9660, fol. 91a; Or. 9662, fol. 105b の JM‘ による。



群れをなして (gurūh gurūh aymaq aymaq) 一斉に来て、城壁の四方を包囲したのを知った。城市の人びとはみな正気を失った。すべての王子たちはこの夜、みずから睡眠を禁じた。

ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムの軍は、イラから、アクス、クチャー (Kūčār), ウシュ, イェンギ・ヒサル [から], [p. 161 / fol. 81a] クルグズからクバード (Qubād) をはじめスーフイー・ミールザー (Šūfī Mīrzā), ハキーム・ミールザー (Ḥakīm<sup>159</sup>) Mīrzā, ウマル・ミールザー (‘Umar Mīrzā) が, チョン・バグシュ (Čoŋ Bağıš), ムンキ (Mūnkī) 氏族 (uruğ) から<sup>160</sup>, 数えきれない無数の軍が集まり<sup>161</sup>, この夜と昼, このような状態であった。それから全方面に散らばった。三日目にヤルカンドの側から戦いの太鼓が打ち鳴らされた。こちら側からも戦いの太鼓がたたかれた。その夜を不安のままに過ごした<sup>162</sup>。

要するに、夜が明けた。両側で戦列が整った。名高い勇士を選んで、いくらかを右翼に、いくらかを左翼に定め、王子たちは中軍のもとに定められた<sup>163</sup>。〔それらの前に大砲手、鉄砲撃ちたちを並べ〕<sup>164</sup>, [名高い]<sup>165</sup> 戦士たちが戦場に入って疾駆し、あらゆる方向に馬を駆って騎射の素早さ (čābuk andāzliq) を見せていた。この海のような両軍は次第に混じり合っていた。軍隊を区別できないほど二つの海が混じった。戦場のなかで、もみ合い、小刀で切り合い、〔時に鋭い刃の槍により、時にきらめく剣により、時に弓矢により討ち殺し〕<sup>166</sup>, 戦場がパン屋の焼き窯のごとく灼熱したように戦った。死期の雲から死の雨が降り始めた。すべての動物が見物に眼を開けた。天使たちが観察し始めた。

ヤルカンド軍から「おお神よ、神の使徒よ、おおフサインよ、殉教者よ」という呼び掛けの

159) D126; Or. 9662, fol. 105b は ḤKM と綴るが, Or. 9660, fol. 91a の ḤKYM による。

160) Or. 9660, fol. 91a は「イラからをはじめ、クチャー、アクス、バイ、サイラム、ウシュ、カシュガル、イェンギ・ヒサル、アルトゥシュから、そして幾つかの集団のクルグズたちからクバード・ミルザー、ハキーム・ミルザー、ウマル・ミルザーが、チョン・バグシュ、ムンキ氏族から」(Īlādīn tartīp Kūčār Āqsū Bāy Sāyrām Ūš Kāšqar Yengi Ḥiṣār Ārtūšdīn vā nečā firqa Qirgizlardīn Qubād Mīrzā Ḥakīm Mīrzā ‘Umar Mīrzā Čoŋ Bağıš Mūnkī uruğīdīn bolup) と記す。

161) jam‘ bolup. D126 は jam‘ を JM‘Y と綴るが, Or. 9660, fol. 91a の JM‘ による。

162) この1文の代わりに, Or. 9660, fol. 91b; Cf. Or. 9662, fol. 105b-106a では「夜明けになるまで十二ムカーム(歌曲), 二十四の奇術(?)で夜を明かした」(Taŋ atgunča on iki muqām yigirmā tört šu‘bada-bāz birlā kečāni taŋ atturdī) と記されている。

163) Or. 9660, fol. 91b; Cf. Or. 9662, fol. 106a は「王子たちは中軍において竜の像の旗のもとに定められた」(Šahzādalar qalb-i laškardā ‘alam-i azhdar paykarnīŋ tūbidā qarār aldīlar.) と記す。

164) Aldīlarīğa tof andāz miltīq andāzlarıñ salıp. Or. 9660, fol. 91b; Cf. Or. 9662, fol. 106a による補遺。

165) nāmdār. Or. 9660, fol. 91b; Cf. Or. 9662, fol. 106a による補遺。

166) gāhī nīza-i yalmān birlā vā gāhī šamšūr-i ābdār birlā vā gāhī tūr kamān birlā urup öltürüp. Or. 9660, fol. 91b; Cf. Or. 9662, fol. 106a による補遺。

声が聞こえて来ていた。〔この呼び掛けの声に驚き、敵の身体に震えが、心に動揺が生じた〕<sup>167)</sup>。両側から大量の血が [p. 162 / fol. 81b] 河となって流れた。ヤルカンド軍が優勢に戦った。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムには、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下から残されたヨーロッパの鉄砲が二挺<sup>168)</sup>あった。〔その長さは〕<sup>169)</sup>九ガルシュである<sup>170)</sup>。この鉄砲を一ファルサング〔離れた〕<sup>171)</sup>所から〔でも〕標的めがけて撃てば、決してはずさないでいた。バイドベ (Bāy Dōbā)<sup>172)</sup> [という丘] の上にホージャ・ブルハーン・アッディーン・アズィーズがいたのであるが、マスハラ門 (Maṣḥara Darvāza)<sup>173)</sup> [の横にある]<sup>174)</sup> 櫓 (sar-kūf) から、その旗 (‘alam) を標的にして、この鉄砲を撃った。決してはずさなかった。旗持ちの馬に当たり、〔旗持ちは〕片手に旗を持ち<sup>175)</sup>、纛 (tuḡ) の前に倒れた。〔旗に命中しなかったのは〕、なぜなら目標 (manzil) が遠かったからである。それから〔ホージャ・ブルハーン・アッディーン・アズィーズたちは〕旗、纛のもとに留まらなかった。この状況を見て、ヤルカンド軍の勇気が増した。カシュガル軍は敗れて退却の太鼓を打ち、両軍は互いに離れた。ホージャ・ヤフヤー・ホージャム猊下、アブド・アッラー・ホージャム、ガーズィー・ベグ、ニヤーズ・ベグ、すべての勇者たちは勝利の榮譽を得て戻り、城市に入って、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下と会見し、戦いの有様を説明した。ホージャム猊下はこの者たちに良き祈りをおこなった。

さて、カシュガル軍が最初ヤルカンドに踏み入った時、ヤルカンドの人びとは一致して密か

167) Bu nidānīn haybatīdīn duṣmanlarnīn badanlāriḡā larza vā yūrāklāriḡā zalzala tüṣār erdi. Or. 9660, fol. 91b-92a; Cf. Or. 9662, fol. 106b による補遺。

168) iki Farang mīlīṡīq. Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choḡas in Kaṣḡarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, p. 271 は「ひとつの二連銃」(eine doppelläufige Flinte) と訳すが、従えない。

169) uzunluqī. Or. 9660, fol. 92a による補遺。

170) ḡarīṣdīn. ガルシュ (ḡarīṣ) は、「親指と小指を張った長さ」であるカルシュ (qarīṣ) またはガルチュ (ḡarīč) と同じであろう。堀直「18～20世紀・ウイグルの度量衡について」『大手前女子大学論集』第12号、1978年、59頁、問野英二『パーブル・ナーマの研究 III 訳注』京都:松香堂、1998年、323頁、脚注780、Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 110 参照。

171) yīraq. Or. 9660, fol. 92a による補遺。

172) ショー氏の訳文では、マスハラ門からおよそ半マイルの丘、Bai-Dubba (または Tippa) と記されている (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkiṣtān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḡammad Ṣādiq Kaṣḡhari,” p. 52)。

173) ヤルカンド城市の東側の城門であり、「マスハラ」は「道化師」の意味である。堀直「回疆都市ヤルカンド——景観の復原の試み——」『甲南大学紀要 文学編』63, 社会科学特集, 1987年, 41, 49頁参照。

174) yanīdaqī. Or. 9662, fol. 106b; Cf. Or. 9660, fol. 92a による補遺。

175) bir qolīda ‘alam tutuḡluq. D126 は tutuḡluq を TVLVḠLDQ と綴るが、Or. 9660, fol. 92a の TVTVḠLVQ による。

に〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャムに次のように申し上げた。「おお、世界の帝王<sup>176)</sup>よ、我々には、あなた様の祝福された耳に密かに【p. 163 / fol. 82a】申し上げたいことがあります。きっとお聞きいれくださるでしょう。すなわち、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムはシナ皇帝 (Hāqān-i Čīm), カルマクの援助により〔全モグーリスターの城市を求めに来て〕<sup>177)</sup>、ヤルカンド以外の城市を取った。〔しかし〕ホタン<sup>178)</sup>は〔取られずに〕残った。ヤルカンド城市は全モグーリスター (Mōgūlistān) の首府 (pāy-taḥt) である。我々自身のなかから崩壊や分散 (bozuqçılıuq vā farākandalik) が生じない限り、ヤルカンド軍は全モグーリスター軍に対抗できる。その〔ような〕裏切りは他の者から生じない。生じてても、信用することはない。ただし、我々は二人の人物を疑っている。その一人はニヤーズ〔・ベグ〕、もう一人はガーズイー〔・ベグ〕<sup>179)</sup>。ガーズイー・ベグには<sup>180)</sup>、ホージャ・ブルハーン・アッディーンの側への忠誠心は低く、その本性において誠実さはない。〔この二人は〕信仰を世俗に売りわたす<sup>181)</sup>。この者の約束は信頼できない。以前からも、この者の不誠実さは実証されている。ニヤーズ・ベグの裏切りの理由というのは、昔からホージャ・ブルハーン・アッディーンの父 (dada)ホージャ・アフマドへの忠誠心は高いのであり、捧げ物もしていることである (nazarī niyāzī bolsa yetip turğan)。〔クルグズの〕部族集団出身の (jamā‘alarīdīn) バハードゥル・ベグ (Bahādūr Beg)<sup>182)</sup>の息子たちがウシュに行ったとき、我々から顔をそむけてカルマクに入り、そこに留まった<sup>183)</sup>。今、彼ら〔カルマク〕のために兵となり、来ているようだ。〔カルマクと〕表裏一体となるおそれがある<sup>184)</sup>。〔付

176) pādīšāh-i ‘ālam. D126 は pādīšāh-i を PADŠAHY と綴るが、Or. 9660, fol. 92b; Or. 9662, fol. 107a の PADŠAH による。

177) tamām Mōgūlistān šahrlāri ṭalabīda kelip. Or. 9662, fol. 107a; Cf. Or. 9660, fol. 92b による補遺。

178) D126; Or. 9660, fol. 82b は HVTN と綴るが、Or. 9662, fol. 107a の HTN による。

179) Or. 9660, fol. 82b は「その一人はガーズイー・ベグ・ハーキム、もう一人はニヤーズ・ベグ・イシクアガ」(biri Ġāzī Beg Ḥākim biri Niyāz Beg işik-ağa), Or. 9662, fol. 107a は「その一人はガーズイー・ベグ (?), もう (?) 一人はニヤーズ・ベグ」(biri Ġāzī Beg (?) yana (?) biri Niyāz Beg) と記す。

180) Or. 9662, fol. 107a は「この者たちには」(bularnıñ) と記し、ガーズイー・ベグとニヤーズ・ベグを指している。

181) 「売りわたす」(satarlar) は三人称複数であるので、その主語を「この二人」と解す。

182) クルグズの首領、クバード・ミールザーを指している。本書【p. 116 / fol. 58b】「日本語訳注 (5)」28 頁の本文および注参照。

183) バハードゥル・ベグの息子フダー・ベルディ・ベグがウシュ付近で裏切ったことを指している。本書【pp. 140-141 / fol. 70b-71a】参照。

184) Īč taš bolsalar, ihtimālī bar. この訳文は確実ではない。

属の兵力も裏切るならば、完璧になってしまう)<sup>185)</sup>。事を処理する前に後悔しても仕方ない<sup>186)</sup>。得策は [p. 164 / fol. 82b] 次のとおりである。我々がこの二人のベグ [ガーズイーとニヤーズ] を捉え、ある場所に留め置くならば、[この二人が] 国の事に介入しないならば、彼ら [ホージャ・ブルハーン・アッディーンたち] に勝利して、再び彼ら [二人] 自身の職務を授けるならばよいでしょう」と申し上げた。

ホージャ・ジャハーン・ホージャム現下はこの者たちに次のように返答した。すなわち、「おお門弟たち (yārānlar) よ、そなたたちは道理にかなったことを言っている。しかし私は、この二人<sup>187)</sup> に対してとても良いことをしたし、塩を与えた。ガーズイー・ベグは我々に対して裏切らないことを数回、誓った。『クルアーン』を仲介にした。おそらく、その約束を守るであろう。たとえ彼が『クルアーン』を信じないとしても、我々は信じよう。もし彼が裏切るとしても、[そのことを] 私は神と使徒に委ねた。ニヤーズ・ベグにはアーイシャ・ベグ (‘Āyša Beg) という娘がいた。彼女をホージャムは娶っていた。まさにそれ故に、ニヤーズ・ベグとの間には<sup>188)</sup> 親戚の責務が定まっている。[ホージャ・ジャハーンはさらに]「おそらく彼も裏切らない。もし彼から裏切りが生じるならば、その罰を神が与える。[私はわが父祖たちに委ねた。

## 詩

おお、塩を味わえ。決して恩知らずになるな

この塩は最後に罰をそなたに与えずにはおかない<sup>189)</sup>」

と返答した。[ヤルカンドの人びとは] 再び次のように申し上げた。すなわち、「そのようであるならば、この二人のベグに、オルダのなかに天幕の宮廷<sup>190)</sup> を建てて与え、[この二人が] そ

185) Muta‘alliqātlar quwwatlik, bu ham hiyānat qīlsa, kamālīga yetkürür. Or. 9662, fol. 107b; Cf. Or. 9660, fol. 93a による補遺。

186) Īš ‘ilājdin ilgāri pašmān sūd bermās. Or. 9662, fol. 107b は Īš ‘ilājdin ilgāri kīn pašmān sūd bermās と記すが、Or. 9660, fol. 93a は Īš ilikdin bargandīn kīn fašmān sūd bermās (事が手から離れたあとに後悔しても仕方がない) と記し、意味が異なる。

187) ikisi. D126 は AYKV と綴るが、Or. 9660, fol. 93a; Or. 9662, fol. 108a の AYKY SY による。

188) arada. D126 は AVRDA と綴るが、Or. 9660, fol. 93b; Or. 9662, fol. 108a の ARADH / ARADA による。

189) Ābā vā ajdādīmga tapšurdum. Nazm. Āy-ki tatīj bir namak zīnhār bolma kūr-namak, bu namak āhīr seni bermāy jazāyī qoymağay. Or. 9660, fol. 93b; Cf. Or. 9662, fol. 108a による補遺。

190) ḥayma bārgāh. Or. 9660, fol. 93b は ḥayma vā bārgāh, Or. 9662, fol. 108a は ḥayma-yi bārgāh (<HYMH’ BARKAH) と記す。

こに<sup>191)</sup>いて、ハーキム、イシク・アガの職務を行うならば、すべての国の人びと<sup>192)</sup>の心は安らぐ』と言った。ホージャムは仕方なくそれに同意し、その日に天幕の宮廷を建て、ハーキム、イシク・アガ<sup>193)</sup>が数日〔そこに〕居を定めた。

〔以下、日本語訳注(7)に続く〕

---

191) šunda。D126; Or. 9662, fol. 108b は ŠVMDA, Or. 9660, fol. 93b は ŠVMDH と綴るが、A グループの写本 (D191, fol. 73b; ms. 3358, fol. 195b; Cf. Turk d. 20, fol. 64b) は当該箇所を「夜昼まさにその場所において (kečä vä kündüz ušbu jāyda)」と記すので、ŠVMDA / ŠVMDH (šumda) を šunda の誤記または訛音とみなす。

192) ahl-i mamlakat。D126 は ahl を記しておらず、Or. 9660, fol. 93b; Or. 9662, fol. 108b により補う。

193) išik-ağa。D126 は AŠKA と綴るが、Or. 9662, fol. 108b の AŠYKAĞA による。